

あつというまだった。

長生太郎に見えたのは、突進してくる濃紺のメルセデスの鼻先だけだ。あの特徴のあるエンブレムが目の前いっぱいにとびこんできて、次の瞬間、体がぼーんと空中にぼったりあげられるのを感じた。

浮いていたのは、すごく長い時間のように思えたが、実際はほんの数秒だろう。背中を下に地面に叩きつけられ、太郎は、うっと息を詰まらせた。

衝撃こそ激しかったが、不思議に痛いとは感じなかった。足といわず、腰といわず、背中、頭、自分が全身を打ったことだけは何となくわかった。

痺れたような熱いような、奇妙な感覚が、背中全体に広がっていた。

(はねられたんだ)

自分の体が地面で弾むのがわかった。

そして猛スピードで道の向こうからやってきたメルセデスが、一瞬だけ赤いブレーキランプを閃かせ、角を曲がっていくのが見えた。

(いつてしまった)

太郎は、仰向けに地面に横たわっていた。じき、五月になろうという、さわやかな春の青空が見える。

青空のほかは――。指一本、首ひとつ動かせないことに太郎は気づいた。

(きれいな空だな)

雲ひとつない、まっ青な空だ。

静かだった。何も聞こえない。ただただ、青い空が広がっているだけだ。

(何てこった、ひき逃げされたんだ、俺は)

そう思ったが、青い空を見ていると、そんなことはどうでもいいように思えてきた。

太郎がはねられたことを、まだ誰も気づいてくれないようだ。ほんの十メートル手前には、太郎がたつた今でてきた、常川医院の門柱が立っている。

――長生くん、すまないが帰りがけに届けものをしてくれないかな

銀髪頭の河井教授の顔が浮かんだ。ノリのきいた白衣を着け、その下から趣味のいいネクタイをのぞかせて丸椅子にすわっている。

——お安い御用です

自分の答える声まで聞こえてきた。

——僕の教え子の、ほら、常川くん、このすぐ近くで外科医院をやってる……

——ええ、常川先生なら存知あげています

——この書類を預けてほしいんだ。頼まれていた臨床試験のデータなんだけどね

「東亜大学医学部」とロゴの入ったクラブT封筒をさしだしている。

白衣の下から金のカフスのはまったワイシャツの袖がのぞいている。手首には金のロレックスだ。そのロレックスは、太郎の上司、鎌田が、河井教授に贈ったものだ。

——わかりました。社に戻る途中、届けておきますよ

——すまんね。それから例の件は、こちらから鎌田くんに連絡しておくから。オークラさんの薬は、内科の方でも、なかなか評判いいみたいだし、な

——ありがとうございます

受けとった封筒を、会社から支給された、ぶ厚い黒い鞆に詰めこむ。「豚バッグ」、太郎ら、オークラ製薬の営業現場の若い社員が、そう呼んでいる鞆だ。

中には、病院に売りこみにいくさまざまな薬のサンプルや、その資料、そしてドクターやナースに配るおみやげ類が入っている。

製薬会社は、基本的にどれも成分が同じ薬にさまざまな商品名をつけて売っている。値段

も同じだし、効果のほどもかわらない。

買ってもらうのは、ただただ、太郎たち営業マン、俗にプロパーと呼ばれる連中の努力にかかっている。

温泉に招待し、ゴルフをセッティングし、銀座に連れていき、女の世話をする。とにかく、少しでも恩を売り、自社の製品を買ってもらうしかないのだ。太郎の上司の鎌田など、その手できごとん、ドクターやナースにとりいるタイプだ。

東亜大医学部の第一外科は、鎌田が外科部長の河井教授を、その手で「たらしこんだ」のだ。そして今、出世した鎌田にかわり、入社二年めの太郎が、ふだんの「ご機嫌うかがい」に通っている。

河井教授は、そういう意味では、業界六位のオークラ製薬にとって、最も大切な「お得意さま」のひとりだ。

河井教授をうんといわせれば、東亜大医学部だけでなく、河井教授の教え子たちがいる、町の診療所や小規模病院でも、オークラ製薬の薬品が使われるようになるのだ。

河井教授の頼みを断るなんて、太郎にできる筈がなかった。

もし河井教授を怒らせたなら、明日にも、太郎はクビだ。クビにならなかつたって、在庫管理の仕事にとばされるのが関の山だ。実際に、別の大学の教授の（助教授だったかな？）とんでもない酒乱の先生が、あまりしつこくからむので頭にきて、ポカリとやったら、翌

日、製薬管理室にとぼされて、今は「倉庫番」になっている先輩がいるくらいだ。

(あーあ)

青空を見あげたまま、太郎は溜息をついた。

誰かが見つけてくれるまでここを動けそうにない。書類を届けにいった常川医院では、先生が留守で、おつかないオールドミス看護婦さんが、

「預かっておきます」

とだけ、ピシャリといって、追いだされてしまった。

あたりは、人けのない住宅街だ。お屋敷のような家が並んでいる。

買物にでもでかける近所の主婦が通りかからない限り、誰も気づいてくれそうにない。

(死んじやうかもしれないな)

ふと、思った。

なぜだか、あまり怖くなかった。ただ、あんまり平凡で、たいしたことのない人生なので、このまま死んだらちょっと情けないくらいだ。

三流大学卒業、二流企業就職。独身、二十四歳。趣味、特になし。特技、なし。恋人……
そうだ、麻美^{まみ}がいた！

麻美だけが、おもしろくない太郎の人生の中で、唯一、ぱっと開いた花のように、華やかな存在だった。

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。